

長い駄文です。お時間のある時に読んでみて下さいね。

立花高等学校通信

## パイルアップ

号外

平成 30 年 5 月 12 日

文責 校長

### おでんとみたらしだんごとアイスクリーム

父は 24 年前に 67 歳で亡くなりました。亡くなる数日前、母にぼそりと言ったそうです。「あの時のおでんが忘れられん」。あの時とは、私が小学校 5 年生の時、初めて自転車で川を超えて遠出を許された時の事です。友人数人と宮崎大学の学祭に人生初の大冒険。両親もさぞ心配だったことでしょう。夕方帰宅した時の光景を不思議と今でも覚えています。父は家の外で私を待っていました。「ただいま！お父さんおみやげ買ってきたよ！」と、私が差し出したのが、学祭のバザーでなけなしの 100 円で購入した「おでん」だったのです。ビニール袋に入れられたおでんは、きんきんに冷え切っていました。ただそれだけの場面です。この場面が、亡くなる直前まで父の中で大切に想われていたと言うことをお通夜の夜に母から聞かされた私は、父親と永遠の絆で結ばれたことを確かに実感し、泣きました。100 円のおでんはどんなに冷えていても、そこで結ばれる人の心の温かさは永遠なのです。

幼少期の私は鍵っ子でした。幼稚園から帰宅すると、共働きの両親を一人で待ちます。レトロ感が懐かしい当時、昭和 40 年代後半は、様々な車売りの文化がありました。私はその中でも、桃太郎の音楽をかけながらやってくる団子屋さんのみたらしだんごが大好きでした。一本 30 円程度だったでしょうか。果たしてその日も、遠くから桃太郎の音楽が聞こえてきます。母は緊急時の為に、ダンスの中でいつも数十円の小銭を準備してくれていました。しかし、その日に限ってその小銭入れが見当たりません。みるみる遠ざかっていく桃太郎の音楽。私は「団子屋さん行ったあ！」と、泣き叫びながら母の職場に電話を入れました。多分 5 歳くらいだったのでしょうか。この電話も不思議と覚えています。遠ざかる桃太郎の音楽も耳に残っています。

その 10 数分後、仕事を抜け出した母が脱兎のごとく家に駆けこんできました。手にはほかほかのみたらしだんごが握られています。「団子屋さんおったよ！」とにっこりほほ笑む母の顔もまた、一生忘れることはできません。電話口で泣き叫ぶ私のために、母はわざわざ仕事を抜け出して団子屋さんの車を探し出したのでした。

そんな母が亡くなる直前の出来事です。入院中の母が「アイスクリームが食べたい」と独り言のようにつぶやきました。「わかった。明日来るときに買ってくるね」と病院を後にした私でしたが、みたらしだんごの温もりを思い出した私は、急遽コンビニに向かいアイスクリームを買って病院に戻りました。わざわざみたらしだんごを買ってきてくれた母を想えば、翌日にアイスを買ってこようとした自分の不義理が胸をしめつけたのです。たかだかみたらしだんご。たかだかアイスクリーム。しかし 40 年の時を経て、確かに私達は同じ愛情の連環の中に生かされていることを実感しました。母にスプーンを使ってアイスを食べさせてあげた病室の光景が頭から離れることはありません。アイスは実は温かい食べ物だったのですね。

母も 4 年前に亡くなり、今となっては両親がどのような方針で私を育てたのかを二人から饒舌に聞き出すことはできません。しかし、今もなお両親を敬愛し、その温もりを忘れることなく大切に想い続けている私の感性は、間違いなく両親から授かった大切な宝物です。貧しい貧しい幼少期でした。修学旅行も 1000 円のお小遣いが捻出できず 500 円しか持たせてもらえないほど、家計はひっ迫していました。しかし、私の心は感謝と敬愛の念で満たさ続けています。日々困難もたくさん感じますが、亡き両親の存在を心に感じるとき、そこには無限のエネルギーが生まれます。

感謝の参観日に際し、皆さんでそれぞれの「有り難う」に気付いてみましょう。有ることが当然、当たり前ではない、だからこそ「有り難い」のです。今はご両親への反発の気持ちを持っている人もいるでしょう。よかよか（^^）。それもまた思春期です。保護者の皆様、いつも子ども達の為に本当にお疲れ様です。でも今日くらいは、誰かの息子、誰かの娘として、大切な何かを思い出して見られませんか？ たくさん「有り難う」が飛び交う、温かい立花でありたいと願っています。